

保育実習での評価の傾向に関する研究 —テキストマイニング分析による頻出語の可視化の試み—

阿部眞弓 高 向山 海野展由

こども健康学科

A Study on the Characteristics of Childcare Training Evaluation ; The Visualization of the Frequency of Key Words by using the Text Mining Analysis

Mayumi ABE, Xiangshan GAO and Hiroyoshi UNNO

要 旨

本研究では、保育実習生の実習園からの総合所見における記述を対象に、テキストマイニング分析を行い、1回目の観察実習と2回目の本実習における評価の共通点及び相違点について、その傾向を明らかにした。

両実習の総合所見における共通点としては、保育実習生の実習に臨む基本的態度についての記述が多いという点が挙げられる。観察実習においては、子どもや保育者を観察する視点や観察実習での具体的取り組み方を示す記述が頻出している。一方、本実習においては、部分実習への準備・取り組み方における指導者との関わりや、指導を含む実践に関する記述が多いことが分かった。

また相違点については、観察実習と本実習とで相反するものではなく、意識の重要度のバランスが変わることによって頻出の度合いが変わることも示唆された。今後の実習指導において、今回の研究で可視化された分析結果を活かしていく必要がある。

キーワード：保育実習評価、テキストマイニング分析、頻出語

Abstract

This study employs the Text Mining Analysis in measuring the frequency of key words used in the evaluation of childcare training. Certain characteristics were observed in the initial observation training, followed by different characteristics in the practical training.

The common feature of evaluation in both types of training is that there were many comments on students' basic attitudes. Regarding the initial observation training, the frequent words used shows what aspects are important to consider and in addition, how to tackle tasks during the observation training. On the other hand, in the practical training, the frequent words used guides interns how to relate with the staff in order to prepare for the brief initial training.

It is important to note that the differences of the two types of training do not contradict each other, but rather express the different levels of students' involvement. The results of this study should be presented to students who are preparing for their upcoming observation and practical training.

Keywords : Childcare Training Evaluation, Text Mining Analysis, Frequency of Key Words

1. 研究の目的

保育者養成における保育実習は、保育現場でこそ体験できる観察及び実践などの学習内容や、実習生自身の保育職への適性判断など、学生の学業と進路選択に大きな影響を与える。その中でも、実習後に養成校に送られる実習評価は、実習生の自己評価や学習意欲、職業選択は勿論のこと、養成校における的確な事前事後指導の検証をはじめ、保育内容専門科目を担当する教員にとっても教授内容を検討するための重要な示唆を与えるものである。

しかし、これまでは実習評価の総合所見には指導上の重点が多岐に渡って記述されているだけでなく、その内容にも一定の傾向があることは読み取れていたものの、それを科学的に分析するには至っていなかった。例えば、柴田ほか(2019)ではテキストマイニングによる実習日誌の助言分析を試みているが、実習評価を可視化して分析した先行研究は見当たらない。

そこで、テキストマイニング分析を用いて総合所見の頻出語を可視化することで、評価の傾向を分析し、保育実習指導に活用できる点を導き出すことを本研究の目的とする。

尚、本研究では保育士資格取得のための保育実習の分析を第1段階として優先し、幼稚園教員免許状取得のための教育実習の分析は次回以降に見送った。

2. データと研究方法

2.1 分析対象のテキストデータ

2015年～2018年に実施された保育実習のべ426件を対象とした。実習生は2名を除き、基本的に2年次の春休み(観察実習)と3年次の夏休み(本実習)1回ずつ計2回の実施に参加した(表1)。その評価票には、(1)実習の基本的姿勢・態度、(2)子どもへの理解とかわり、(3)支援に関する知識・技術等の理解・習得、(4)人間関係・社会関係への理解、(5)自己理解、実習目標・計画の達成度の5項目に対する5段階評価も含まれている。本研究は自由記述の総合所見を対象とした。

表1 年度別・実施時期別参加件数

年度	春休み		夏休み		合計	
	件数	構成比	件数	構成比	件数	構成比
2014	52	12.2%			52	12.2%
2015	51	12.0%	52	12.2%	103	24.2%
2016	61	14.3%	51	12.0%	112	26.3%
2017	50	11.7%	61	14.3%	111	26.0%
2018			48	11.3%	48	11.3%
合計	214	50.2%	212	49.8%	426	100%

2.2 テキストマイニングの方法

テキストマイニングはデータマイニングから派生した用語であり、1990年代から使用されるようになり、データマイニングはデータベースの中に格納されている構造化されたデータから、特定のパターンや傾向を掘り出す技術、行為の総称である(石田・金, 2012)。本研究で用いる計量テキスト分析ソフト KHcorder は文章を単語や文節などで区切ったりまとめたりするものである。これは文章を単語・文節レベルで分析する統計手法であり、規則性のある情報を取り出すことができる(樋口, 2014)。得られた「出現の頻度」や「共出現」「出現傾向」などを解析することで記述パターンやルールなどの解明を目指す。

2.2.1 形態素解析

本研究で使用した KHcorder では、分析データが名詞、サ変名詞、形容動詞、固有名詞、動詞、形容詞、副詞等に分解される。以下は KHcorder を用いた形態素解析事例であり、文中の“/”は形態素ごとの区切り記号である。
 <形態素解析事例>

実習/を/追う/ごと/に/子ども/達/へ/の/声/かけ/も/増え/、/努力/を/感じる/こと/が/で/き/ま/し/た/。

さらに、上記例の声/かけといった複合語として使用されていると考えられる形態素は、新たに複合語として定義しなおすことにより、単語ごとの形態素には分解されず、“声かけ”として取り出すこともできる。

2.2.2 抽出した特徴語の関連性の分析

形態素解析が完了したテキストデータについて、抽出語の出現頻度を確認しながら、抽出語間の関連性を分析する。その分析過程では分析者の主観的要素が入るため、できる限り各種の客観的な関連性分析手法が必要となる。本研究は KHcorder を用いて探索する手法として、単純集計、共起ネットワークと対応分析を採用した。

3. 結果

3.1 抽出した頻出語について

形態素解析を行い、観察実習および本実習に関する所見における抽出語の出現回数を主要な品詞別に表2と表3に示した。観察実習については、記述統計量として、抽出語総数は1,119語、出現回数の平均は7.4回、出現回数の標準偏差は25.2であった。表2は、出現回数の平均から約1σ程度以上の出現回数である30語以上の名詞、サ変名詞、形容動詞等の頻出語を掲載した。固有名詞や動詞等の他の品詞はその抽出語自体の意味だけでは具体的な所見としてあてはめることが困難であるため、省略した。また、本実習については、記述統計量として、抽出語総数は1,117語、出現回数の平均は7.4回、出現回数の標準偏差は24.8であった。表3は、出現回数の

表2 観察実習における抽出語の出現回数の上位表

観察実習																
順位	名詞	サ変名詞	名詞C	形容詞	タグ	副詞	形容動詞	副詞可能								
1	子ども	179	保育	141	姿	138	良い	77	子ども達	194	もう少し	41	丁寧	37	今後	57
2	積極	129	質問	48	声	50	優しい	48	保育者	38						
3	笑顔	92	行動	40	次	35	明るい	45								
4	自分	89	理解	39												
5	日誌	78	反省	36												
6	課題	57	期待	35												
7	関わり	51	緊張	35												
8	姿勢	50	観察	30												
9	好感	39	記録	30												
10	意欲	35	指導	30												
11	クラス	32														
12	絵本	32														
13	職員	32														
14	年齢	32														

表3 本実験における抽出語の出現回数の上位表

本実験																
順位	名詞	サ変名詞	名詞C	タグ	形容詞	副詞	形容動詞	副詞可能								
1	子ども	217	保育	149	姿	133	子ども達	154	良い	94	もう少し	36	丁寧	33	今後	51
2	積極	119	指導	59	声	65	部分実習	58	明るい	39						
3	自分	94	反省	54	次	36	保育者	44								
4	笑顔	82	質問	49												
5	日誌	70	理解	39												
6	関わり	52	行動	36												
7	姿勢	49	挨拶	31												
8	課題	41	実践	31												
9	言葉	37														
10	様子	36														
11	クラス	32														
12	態度	31														

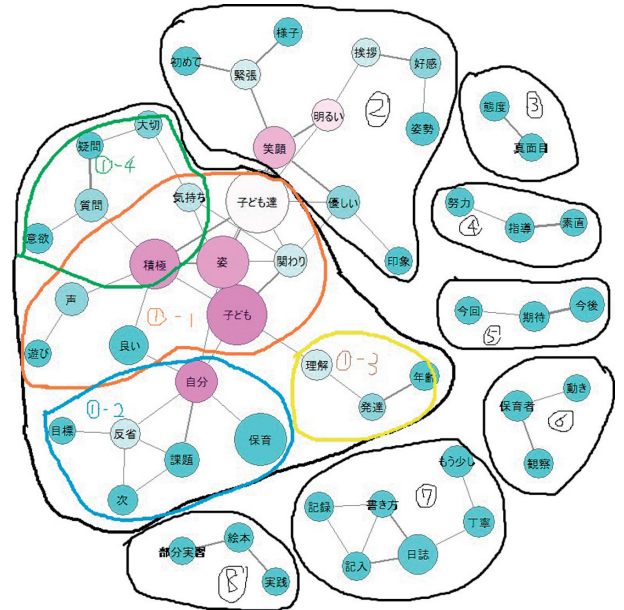


図1 観察実習の所見における頻出語間の共起ネットワーク

平均から約1σ程度以上の出現回数である30語以上の名詞、サ変名詞、形容動詞等の頻出語を掲載した。固有名詞や動詞等の他の品詞はその抽出語自体の意味だけでは具体的な所見としてあてはめることが困難であるため、省略した。

3.2 実習期別における所見の関連について

観察実習と本実習の所見における記述の相違点と共通点を分析するために、共起ネットワークを作成した。共起ネットワークでは線が太いほど語間の共起関係が強いことを意味する。また丸の大きさは語の出現数を表しており、大きいほど出現数が多いことを意味する。

3.2.1 観察実習の所見における頻出語間の共起ネットワークについて

表2に示される観察実習における頻出語について、「文単位」かつ「描画数60」の設定により、共起ネットワーク分析を行った結果を図1に示し、頻出語間の関連性に基づいて①～⑧のグループ分けを行い、さらに①をより強い傾向を表す①-1から①-4に小グループ化した。

3.2.2 本実習の所見における頻出語間の共起ネットワークについて

表3に示される本実習における頻出語について、「文単位」かつ「描画数60」の設定により、共起ネットワーク分析を行った結果を図2に示し、「笑顔」を中心に頻出語間の関連性に基づいて①～⑤のグループ分けを行った。

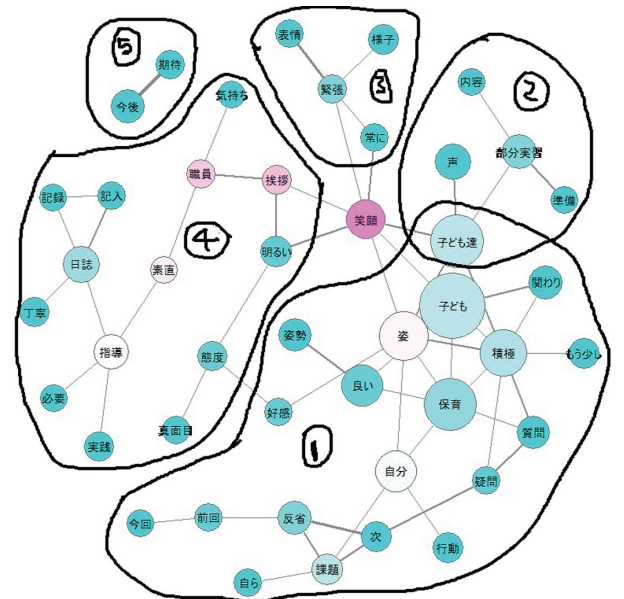


図2 本実習の所見における頻出語間の共起ネットワーク

3.2.3 実習期別の所見における頻出語間の共起ネットワークについて

観察実習および本実習それぞれの所見を同時にプロットした頻出語間の共起ネットワークを図3に示した。両実習における共通した頻出語を橙色、観察実習側に出現する頻出語を緑色、本実習側に出現する頻出語を青色で囲んで示した。

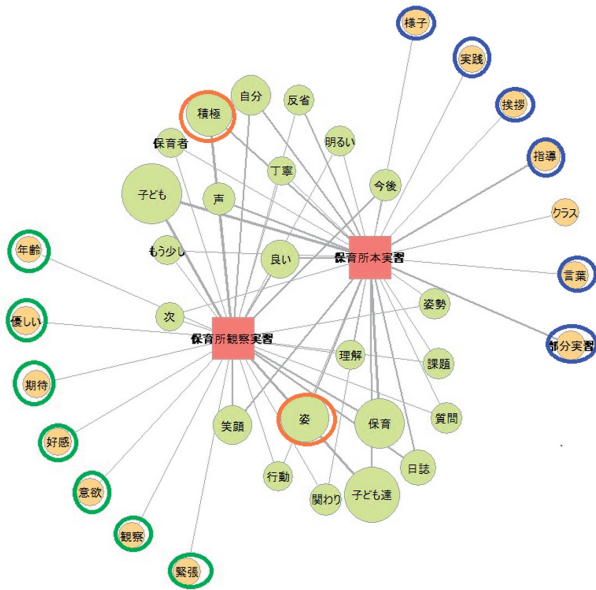


図3 実習期別の所見における頻出語間の共起ネットワーク

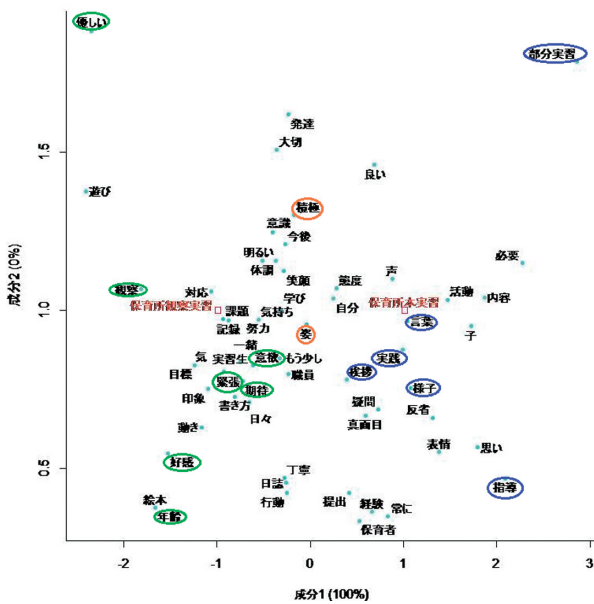


図4 実習期別の所見における記述特徴

3.2.4 実習期別の所見における記述特徴について

「最小出現数 30」で「上位 50 位」差異が顕著な語に対して、実習期別で対応分析を行なった結果を図4に示す。対応分析では、出現パターンに取り立てて特徴のない語が原点(0, 0)の付近にプロットされる。そして、「保育所観察実習」と「保育所本実習」それぞれに近い位置でプロットされている語はそれぞれの実習を特徴づける語であると解釈される。

なお、図4において橙色、緑色、青色で示した頻出語は、図3で記された実習期別の所見における頻出語間の共起ネットワークが示す所見と同様の傾向を示している。

4. 考察

4.1 観察実習の所見の特徴について

先ず図1を概観すると、頻出語がつながっている大きな集団1つと、その周辺に独立した小さな集団6つを見ることができる。この大きな集団を①「子どもに対する関わり方の特徴を表す頻出語集団」と、②「子どもに関わる実習生の特徴」とに分け、さらに中心語から派生している関連性の強い頻出語集団として①を①-1から①-4まで4つの小集団に分けて結果をまとめ考察を行なった。

①【子どもに対する関わり方の特徴】

①-1【積極的な関わり】

実習生と子どもが関わることによって、どう結びついていくのか、図1の中心部には、「子ども」や「子ども達」の「姿」を、その「気持ち」を踏まえて「積極」的な「関わり」から受けとめる視点が示されている。この「積極」や「関わり」は「子ども達」という集団とも「子ども」という個ともつながっている。その「積極」性が「良い」と評価されている。また子どもへの「声」掛けや子どもとの「遊び」が「積極」性を見る指標になっていると言える。

①-2【課題意識】

「子ども」と「自分」は「保育」「課題」「反省」とつながる。「自分」の意識は「課題」や「目標」の「反省」とつながり、「次」への「反省」が「課題」であることを示す。

①-3【発達理解】

「子ども」を「年齢」による「発達」の「理解」から捉えることが示されている。

①-4【質問する姿勢】

実習生の「意欲」は「質問」や「疑問」を「積極」的に行うことから評価されている。

②【子どもに関わる実習生の特徴・笑顔】

実習生の「笑顔」が常に評価対象となっており、「明るい」「挨拶」が好感を生むこと、「優しい」「印象」を与えること、「笑顔」になるまでの過程では「初めて」の実習で「緊張」していることを物語っている。

③【真面目な態度】

真面目という実直さが評価対象になっている。

④【指導を素直に受けとめ、努力すること】

指導を受ける際の実習生の素直さと受けとめ方が、その後の実習生と指導者の関係性に影響することを示唆している。

⑤【今後への期待】

1回目の保育実習の学び・体験がその後に活かされるべきことを表している。

⑥【保育者の動きを観察すること】

実習生の視点が子どもだけに留まることなく、「保育者」の「動き」の「観察」が大事な学びとなることを

示している。

⑦【実習日誌】

「日誌」を「もう少し」「丁寧」に書くことや、「記録」の「書き方」が課題となることを示している。

⑧【部分実習と絵本】

観察実習では「絵本」が「部分実習」や「実践」の第一歩となることを示している。

4.2 本実習の所見の特徴について

先ず図2を概観すると、頻出語が繋がっている非常に大きな集団1つがあり、その横に独立した小集団1つがある。この大きな集団を頻出語の関連性の強い①から④に分けて考察を行なった。

☆【笑顔が全体的なつながりを生む】

図2の大集団の中心に位置する頻出語「笑顔」は、多くの頻出語と繋がっている共通性を有している。この「笑顔」が「子ども達」「子ども」「姿」「明るい」「挨拶」「緊張」「常に」と観察実習以上に全体的につながっており、笑顔が本実習においても基本的態度であること、さらに笑顔をもって対応することの有用さを実習生自身が学んでいる表れと解釈できる。

①【子どもへの関わりは勿論のこと、自分の課題を意識して活動】

図2の左から下部にかけて、「子ども」「保育」「行動」や「自分」「課題」「自ら」のつながりが伸びている。「課題」は「前回」や「今回」の「反省」につながり、「次」の自分の課題についての「疑問」「質問」を「積極」的にしようとする姿が評価されていることが分かる。本実習でも「子ども」と「関わり」は強くつながっており、子どもとの関わり方が評価ポイントであることを示している。

②【子ども達との部分実習】

集団としての「子ども達」への「声」かけや「部分実習」が本実習ではより強く意識されており、その「準備」と「内容」が評価ポイントであることを示している。

③【本実習でも緊張】

図2上部には「緊張」「表情」「様子」「常に」が「笑顔」から繋がっていることから、観察実習の経験があるとは言え、部分実習の機会が増す本実習では、実習生が更に緊張する場面が増えることを示している。

④【指導を受けとめる態度が重要】

図2の左側には「笑顔」から発して一方では「挨拶」「明るい」「態度」「真面目」「好感」とつながり、実習生の基本的態度の重要性が示されている。他方、「挨拶」は「職員」「気持ち」「素直」「指導」「実践」「必要」「日誌」「記入」「記録」「丁寧」とつながっており、職員の実践指導や日誌についての指導を素直に受けとめる実習生の対応が大きな評価ポイントだと分かる。図2上部の「気持ち」が子どもとつながるよりも「職員」に直接つながっている点は、実習生が職員の保育

を読み取る姿勢の重要性を示している。

⑤【今後への期待】

本実習の成果をその後の学びや進路に生かして欲しいという保育現場の期待が示されている。

4.3 実習期別の共通点と相違点について

4.3(1) 観察実習と本実習の記述共通点について

図1と図2の比較、及び図3,4の分析により、両実習に対する所見における記述共通点について以下のことが読み取れる。

あ)【子ども・子ども達・積極・姿】

図1,2の頻出語の出現回数(丸の大きさ)とつながり方から、実習生が個の「子ども」や集団の「子ども達」に「積極」的に関わること、及び「子ども達」の「姿」をどのように捉えているかが基本的評価になることが分かる。「子ども」「子ども達」「積極」「姿」は図3においても両実習と太くつながっており、観察実習と本実習の両方に強い共起関係があると認められる。さらに図3と図4での中央橙色「積極」と「姿」は、両実習との距離関係が最も均等であることから、「積極」と「姿」が両実習に最も共通する頻出語であると言える。

い)【笑顔・明るい挨拶】

図4では「積極」「姿」に続いて両実習との距離関係が均等である頻出語に「笑顔」がある。図1,2とも「笑顔」と、これにつながる「明るい」「挨拶」は、これらが実習生の外見的、言語的な基本的態度として求められていると分かる。

う)【子どもへの関わりと指導者への質問】

基本的共通語の「積極」は、図1,2においては「子ども」「子ども達」「関わり」と直接つながっていると同時に、「質問」「疑問」ともつながっている。これは積極さの評価が第一には子ども達との関わり、第二には指導者への質問によって評価されると解釈できる。

え)【保育を構成する全体像】

図3で明らかのように、多くの頻出語が両実習に共通して繋がっているだけでなく、図1,2では頻出語同士が共起ネットワーク上で多様なつながりを持つことを表している。このことから、実習に際しては「保育」を個別の頻出語だけで理解するのではなく、保育を構成する全体像を理解しようとすることの大切さを示していると解釈する。

4.3(2) 両実習に対する所見における記述相違点について

次に、図1と図2の比較、及び図3,4の分析から、観察実習と本実習の所見における記述相違点について、以下の点を読み取ることができる。

A)【意識は「自分」から「保育」へと移行する】

図1の観察実習では「自分」という頻出語から「姿」「子ども」「保育」「良い」「課題」「反省」という6つ

の頻出語につながっているのに対し、図2の本実習では「保育」という頻出語から「子ども」「姿」「良い」「自分」「積極」「質問」という6つの頻出語につながっており、観察実習での「保育」は他の頻出語とつながっていない。これは、観察実習ではまだ不慣れな実習生の意識が「自分」に集中していると見られがちなのに対し、本実習ではようやく「保育」を意識した評価を受けていると読み取ることができる。

B) 【笑顔は両実習の共通点ながら、本実習ではさらに実践度を増す】

「笑顔」が両実習共通の要であることは前述したが、図2における「笑顔」の方が、他の頻出語とのつながりが増していることから、直接子どもと関わるような保育実践機会の増す本実習においては、人的環境としての笑顔をより意識して子どもと活動することが大切な評価点になっていることを示していると言える。

C) 【本実習では保育についての積極的な質問の重要度が増す】

図1,2において「積極」と「質問」は重要な位置を占めているが、特に図2では「保育」や「もう少し」と直接つながっていることから、部分実習の機会が増える本実習においては、観察実習以上に保育についての指導者への直接的な質問が期待されていることが分かる。

D) 【観察実習では日誌や保育者の観察、絵本が重要であり、本実習では指導、実践が重要】

図1の観察実習では「保育者の動きを観察」し、「日誌をもう少し丁寧に書き」、「絵本を部分実習の実践」に活用する具体的指摘がなされているのに対し、図2の本実習では「日誌についても実践についても、職員の指導を素直」に受け、「部分実習はその内容や準備」が大切であること、即ち指導者とのコミュニケーションに基づき、実践内容を深めることが求められていると読み取れる。

E) 【観察実習のみに表れる「優しい」】

図3の観察実習側に表れる頻出語である「年齢」「優しい」「期待」「好感」「意欲」「観察」「緊張」には、観察実習と強い共起関係が認められる。この中で、「優しい」は図1において「子ども達」「笑顔」「関わり」「印象」とつながっている。「子ども達」との「関わり」の中で実習生の「優しい」「印象」が人的環境として観察実習での評価ポイントであることが分かる。

F) 【観察実習で強調される基本的態度と具体的観察行動】

図3,4の緑色頻出語に示されるように、「優しい」に続く図4の観察実習側の頻出語には「遊び」「観察」「対応」「気」「目標」「印象」「記録」「好感」「絵本」「年齢」などがあり、図3の観察実習のみとつながっている頻出語とも共通している語が多い。このことから、「緊張」「意欲」「好感」「期待」「優しい」といった実習生の基本的態度に加え、子どもの「年齢」を意識した「観察」といった具体的な行動目標が重要

であることが分かる。

G) 【本実習で強調される部分実習のための実践的指導】

図3,4の青色頻出語に示されるように、本実習側に並ぶ頻出語としては、「部分実習」「言葉」「クラス」「指導」「挨拶」「実践」「様子」があり、これらは図4でも本実習との強い関連が認められた。特に図3での「部分実習」と「指導」が本実習との線が太く、強いつながりを持つことを示している。本実習では「部分実習」での「指導」を含む「実践」が重要となり、それは「クラス」単位の「実践」となる場合があることを示している。「言葉」の遣い方も実習生評価に取り上げられ、実習生自身の「挨拶」「様子」が評価対象になると解釈できる。

H) 【「関わり」の持つ意味の違い】

図3にある「関わり」は両実習の中心部下側に位置し、どちらの実習においても重要な頻出語であることを示しているが、図1と図2を比べると「関わり」からの線のつながり方に違いがあることが分かる。即ち、観察実習では「関わり」は「子ども」「子ども達」「姿」「優しい」「気持ち」と多くにつながり、その後も各方面に万遍なく派生している。まずは子どもと関わるのが観察実習での基本であることを示している。

一方、図2での本実習では「関わり」は直接的には「子ども」と「積極」につながるのみである。単に「関わり」を持つ以上の配慮が求められていると推察される。

5. まとめと今後の課題

以上のように、テキストマイニング分析を用いて総合所見の頻出語を可視化することで、評価の傾向が見えてきた。これらの分析結果と考察から、保育現場の評価者が実習生を見る視点、即ち保育実習指導に活用できる点を以下にまとめた。

①外見的態度

「緊張」場面の多い実習現場においても、まず「明るい笑顔」でいることは、実習生の備え表現すべき外見的態度として挙げられる。

②言語的態度

同時に、声に出しての「挨拶」「声掛け・言葉掛け」「言葉遣い」などが、実習生の表現すべき音声的動作・活動となる。

③姿・姿勢としての「積極性」

実習に向かう姿勢としての「積極」的な「気持ち」を「行動」や「保育者への質問」として表現することが大切である。

④観察と学びの対象

実習生は「子ども」には目が向きやすく、その接し方や対応に追われがちであるが、実習生としての「観察」

と「学び」のためには、「子ども」「子ども達」だけでなく「保育者・職員」も観察の視点・対象となることを忘れてはならない。即ち、子どもからの学びと同時に、保育者・職員の言動から保育上の配慮点を学ぶ意識が重要となる。

⑤課題意識と記録

実習での目標を日々意識するために「課題」を持ち続け、その「反省」を「日誌」に「記録」することが必要である。

⑥発達段階

「発達」段階を事前に学習した上で、実際の園での様子と照らし合わせるような「課題意識」を持つことが実習中の「発見」や「学び」となることを意識して実習に臨むことが必要である。

⑦具体的行動としての「関わり」

子どもに対しては、相手の気持ちや必要に応じて実習生がどのように関わるかが重要な点である。状況に応じて見守ることも「関わり」になることは理解しておきたい点である。

⑧具体的実践

観察実習では「遊び」や「絵本」のための準備が有益であるのに対し、本実習では「部分実習」や「指導」そして保育の「内容」を意識した準備が大切である。

⑨保育を構成する全体像

保育を場面ごとに切り離して理解するのではなく、保育をつなげている全体像を理解しようとする意識を持つことが大切である。

尚、今回は見送った幼稚園教育実習での総合所見分析を行い、保育実習との共通点及び相違点を考察することも直近の課題となる。また本研究における頻出語の傾向は実習事前事後指導に活用するだけでなく、他の保育専門科目担当教員とも共有し、いかに教授内容の中に活かしていけるかについても、今後の中期的課題としたい。

参考文献

- 樋口耕一 2014 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—』ナカニシヤ出版
- 一般社団法人全国保育士養成協議会研究委員会 2018 『保育実習の効果的な実施方法に関する調査研究』一般社団法人全国保育士養成協議会
- 一般社団法人全国保育士養成協議会専門委員会 2005 『効果的な保育実習のあり方に関する研究Ⅲ—保育実習指導のミニマムスタンダード—』保育士養成資料集第42号
- 石橋裕子・林幸範編著 2018 『幼稚園・保育所・児童福祉施設等実習ガイド第二版』同文書院
- 石井基広・金 明哲 2012 『コーパスとテキストマ

イニング』共立出版

- 伊藤恵美・井上孝代・いとうたけひこ 2012 『社会福祉士実習教育における教育評価の検討—学生の実習報告書のテキストマイニング分析を通して—』静岡県立大学短期大学部研究紀要 26-W 号,1-12
- 片瀬拓弥 2015 『インターンシップ自己評価表のテキストマイニング分析』清泉女学院短期大学研究紀要(34), 1-10.
- 厚生労働省編 2018 『保育所保育指針解説書』フレール館
- 柴田卓・伊藤哲章・猪股照子・仲西真美子・三瓶令子 2019 『教育実習における学生への指導内容に関する研究』郡山女子大学紀要 45-62
- 海野展由・高向山・富田知可子・小野真裕美 2018 『保育系学生の保育実践力と学内学習習得度の関連性について』常葉大学健康プロデュース学部雑誌第12巻第1号,15-19